

# ゆめと学びを育てる —「響き合い」の中で国語力を育てる—

「響き合う」学習環境を整えるための情報機器の活用

浜松市立中ノ町小学校

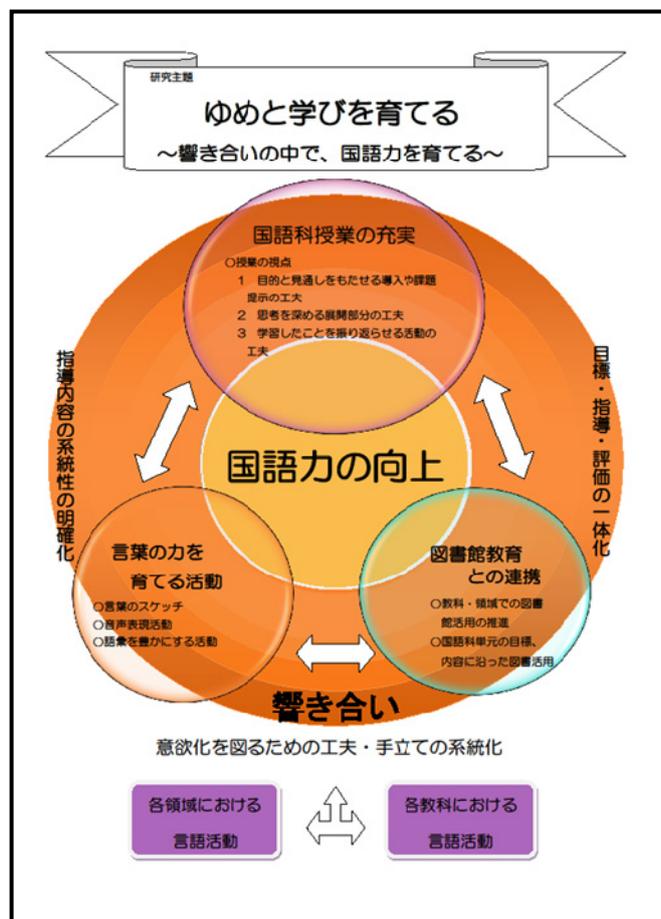
〒435-0004  
静岡県浜松市東区中野町427-1

<http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/nakanomachi-e/>

## 1 これまでの研究の経過

本校の国語科の研究は、「第13回全国小学校国語研究大会」の会場校となったことに端を発している。それから27年間、継続して国語科教育研究に取り組んできた。その中で大切にしてきたことは、子供が、体験を通して自らの見方・感じ方・考え方を変容させ、新たな見方・感じ方・考え方を言葉で再構成する経験を積み重ねていくことである。そして、体験と結び付いた言葉の力を「国語力」と押さえ、国語力を高めることで新たな学びを創り出す教育課程を推進してきた。子供たちの「生きる力」をはぐくむためには、一人一人の子供が、自らをかけがえのない存在であると自覚し、身の回りの「人・もの・こと」と主体的にかかわり合うことが必要である。そこで、私たちは、自分を振り返り新たな自分を知ること、自信をもち、互いに学び合い、たくましく成長していく子供を育てたいと考え、教育目標「自分を知り 共に伸びる子」を設定した。そして、目標の具現化のために、重点課題「『聴く』力を育てる」を設定し、取り組むこととした。「聴く」ことは、相手の思いや考えを聴くことで、自らを知り、相手の思いや考えを体全体で受け止めること、お互いの思いや考えを通じ合わせることである。

学習の中では、子供の心の底からわいてくる「知りたい」、「できるようになりたい」、「よくなりしたい」といった思いや願いを実現させることが大切だと考えた。この思いや願いを「ゆめ」ととらえ、その「ゆめ」を実現させるために、自らの課題に挑戦していく過程を「学び」ととらえた。「ゆめ」と「学び」は成長のための両輪であり、



これらを育てることによって、主体的な学習が促される。さらに、子供が自らの「ゆめ」と「学び」を育む過程で、他者や学習対象に共鳴し、共感し合える学習環境、学習集団であれば、個々の「ゆめ」と「学び」の促進が期待できるだろうと考える。また、そのような学習環境、学習集団の中では、「体験」はより充実したものとなり、その「体験」と結びついた「言葉の力」はより確かで豊かなものになるだろう。そこで、全ての教育活動の中で、子供たちが、主体的に人やものやことに関わり、自分自身を成長させようとする意欲や態度を身に付けさせたいと考え、研究主題を「ゆめと学びを育てる―響き合いの中で、国語力を育てる―」を設定した。

## 2 研究の目標

これまでの取り組みの成果により、本校児童の言葉に関する感性は磨かれている。子供が自らの「ゆめ」と「学び」を育む過程で、他者や学習対象に共鳴し、共感し合える「響き合う」学習環境、学習集団であれば、個々の「ゆめ」と「学び」のさらなる促進が期待できる。「響き合う」中での学びは、子供にとって豊かな経験として蓄積され、確かな自分を創っていくことにもなるだろう。「響き合う」学習環境を整えるためには、情報機器の活用が大変有効であり欠かせないものである。中でも、日常的に、デジタル教科書や実物投影機の活用と、タブレット端末の活用の組み合わせにより、子供同士が共鳴したり共感し合ったりすることができる環境の整備は急務である。特に、子供が自ら進んで機器を使うことができる環境を整えれば、子供の意欲につながり、より充実した「響き合う」学習環境、学習集団として高まると考えられる。

## 3 研究の手立て

1学級の在籍数が24名という比較的少人数の4年生を中心に、本年度パナソニック教育財団の助成金を得て購入したアップル社のiOSタブレット、iPad Air2を6台及び、光村図書国語科デジタル教科書、実物投影機等、ICT機器の活用を図り、子供たちの取り組みの様子の変化を読み取ることとした。

## 4 研究実践

〈実践事例1〉第4学年国語科「おすすめの本をプレゼンテーションしよう」

～ウナギのなぞを追って～ 光村図書

### (1) 教材について

教科書教材の「ウナギのなぞを追って」は、ウナギの産卵場所はどこかという謎を追い求めて調査を続けた研究者たちが、その場所をほぼ突き止めるまでの研究の道筋と研究者たちの地道な努力や熱意を描いた文章である。産卵場所を調査するために仮説を立てて検証し真実に迫っていく過程において、真実と考察の文章が繰り返されている。また、地図や表、写真などの資料が多く、それに対応した文章により構成されており、プレゼンテーション的な構成になっている。この教材を使ってプレゼンテーションにまとめることは、図表を用いて要点をまとめ自分の考えを表現させるのに適していると考えた。

そして、自分で選んだ、おすすめの本を読んで知ったことをプレゼンテーションするという目的をもたせることで、事実とそれに基づいた考察とで構成された科学読み物を読んで自分が関心をもったことを中心に、要約・引用して紹介する活動を促していくこととした。

## (2) 学習の流れ

学 習 活 動 (時数)
① プレゼンテーションで科学読み物を紹介する手法を理解し、学習計画を立てる。 a プレゼンテーションの特徴をつかむ。(1)
② 科学読み物を読み、プレゼンテーション資料を作る。 b 教材文や選んだ本を読んで興味をもったことを書く。 【教材文】(1) 【選んだ本】(1) c 最も興味をもったことを中心に要約して、2枚目をつくる。 【教材文】(1) 【選んだ本】(1) d 何について紹介できる本なのかをつかみ、1枚目をつくる。 【教材文】(1) 【選んだ本】(1) e 筆者の研究について自分の感想をもち、3枚目をつくる。 【教材文】(1) 【選んだ本】(1)
③ 選んだ本のプレゼンテーション資料を作成し、紹介し合う。 f 選んだ本でプレゼンテーション資料を作成する。(1) g 互いにプレゼンテーションをする。(1)

aの「プレゼンテーションの特徴をつかむ」場面では、科学読み物を要約してプレゼンテーションするという方法を理解させるために、3年生時に学習した『ありの行列』を基に教師が作成したプレゼンテーションを、電子黒板を使用してモデルとして提示した。

bの「教材文や選んだ本を読んで興味をもったことを書く」場面では、自分の興味を中心に明確にさせるために、教材文や選んだ本に使われている図や資料ごとに見出しをつけることで、文章の内容を捉えられるようにした。その際、タブレット端末を使用することで、4人のグループごとに話し合いながら図や資料に見出しをつけていった。また、電子黒板に映し紹介することで、全体への共有を図った。

c～eの「プレゼンテーション資料を作成する」場面では、最も興味をもったことを中心に要約させるために、興味を感じたことに関する資料を選択させ、それに対応する、大事だと思うキーワードや文を見つけて短くまとめていった。タブレット端末の台数が6台しかないため、ワークシートを主体に作業を進めた。実物投影機でワークシートを映すことで全体への共有を図った。

fの「選んだ本でプレゼンテーション資料を作成する」場面では、タブレット端末を使用して必要な図や資料を撮影しパソコンに取り込み、プレゼンテーションソフトを使用して作業を進めた。作成する際には、同じ本を紹介する者同士で交流をし、関心をもったところの違いを基に互いに助言し合った。

gの「互いにプレゼンテーションをする」場面では、違う本を紹介した者同士でグループを組み、タブレット端末を使用して発表を進めていった。分かりやすさ、互いの良さを視点に交流活動を行った。また、各グループの代表者は電子黒板でおすすめの本のプレゼンテーションを行い、全体への共有を図った。

## 〈実践事例2〉第4学年 言葉の力を育てる活動「言葉のスケッチ」

### ～ サイダー ～

#### (1) 言葉の力を育てる活動について

言葉の力を育てる活動は、朝の15分の日常活動で、文を作る活動や声に出して読む活動を通して表現力を育んだり、美しい日本語を味わう活動や伝統的な言語文化に触れる活動を通して言語感覚を養ったりする活動である。また、友達と話し合ったり発表し合ったりする活動を通して、自分の思いや考えを確かなものにしたり、言葉を使って交流することの楽しさを味わったりする活動でもある。そして、この活動は国語科で身に付けさせたい基礎的・基本的な知識・技能を支えている。「言葉のスケッチ」「音声表現活動」「語彙を豊かにする」などの活動がある。

#### (2) 活動内容

① サイダーを飲む様子を通して自分が体感したことをメモに書き出す。

お互いが飲む様子をタブレット端末で撮影することで、自分自身が飲む様子をみることができた。何度も見返し、細かい部分までメモする様子が見られた。

② 様子がよりよく伝わるように、比喩や擬態による表現方法を知る。

サイダーの泡の様子や、グラスへの光の入り具合、その時々にする音など、何度も見返すことで、より豊かに擬態表現ができるようになった。また、その時に思わず出た声も記録されているため、比喩表現に活用できた。

③ メモを基に比喩表現や擬態語を用いて工夫して文章を書く。

## 5 研究の成果

### (1) 電子黒板によるデジタル教科書の活用や実物投影機の活用

- ・ 教材文を提示して、子供が自分の考えの根拠として選んだ文に線を引いたり、文と文を結びつけたりすることで、話し合いを焦点化し、友達との関わりの中で読む力を育てた。
- ・ 原稿用紙の使い方を提示して、理解を促したり、推敲する際に、下書きと推敲後の例文を提示したりするなどして、書く力を育てた。

### (2) タブレット端末活用

- ・ グループの話し合いの結果を、タブレット端末を活用して共有したり、学級全体に広めたりして、比較したり、取捨選択したりする力を育てた。
- ・ タブレット端末を活用して、実際に友達の書いた文を提示することで、話し合いを焦点化し、友達との関わりの中で書く力を育てた。
- ・ タブレット端末を活用して、人の動きを写したり、写真を共有したりした。
- ・ グループの話し合いの結果を、タブレット端末を活用して共有したり、学級全体に広めたりして、比較したり、取捨選択したりする力を育てた。
- ・ タブレット端末を活用して、実際に友達の書いた文を提示することで、話し合いを焦点化し、友達との関わりの中で書く力を育てた。

## 6 今後の課題

本研究では、デジタル教科書や実物投影機の活用と、タブレット端末の活用の組み合わせにより、子供同士が共鳴したり共感し合ったりすることができる環境を整えてきた。子供が自ら進んで機器を使うことができる環境を整えたことで、子供の意欲につながり、より充実した「響き合う」学習環境、学習集団として高まったと考えられる。特に、4年生においては、4人で1台のタブレット端末を使えたことで「響き合う」学習が効果的に進められた。しかし、在籍数の多い学級においては、6台のタブレット端末で、響き合わせるために「比べる」「分類する」「結び付ける」「まとめる」をするときに、1グループの人数が多くなり、効果的に進められない場面が見られた。公教育において個における教育効果の差があってはいけない。タブレット端末を購入することで多人数学級に対応できる環境をすぐに整える必要があると考える。